

企業行動研究部会議事録（第 242 回）

日 時： 平成 28 年 10 月 17 日(月曜) 18:00-20:00

場 所： 中央大学駿河台記念館 3 階 350 号室

出席者： (22名 井上(真)、上原、大島、勝田、河口、北川、木下、西藤、佐久間、櫻井、佐藤、出口、永井、比賀江、菱山、平塚、古谷、古山、増澤、松尾、峰内、宮澤、敬称略)

1. 連絡事項

勝田部会長より、9月17日開催の学会理事会について報告が行われた。

- ・新入退会について：8名入会 退会1名 450名を超えた(承認)
- ・新規部会の立上：ESG投資研究部会 監事である小方部会長で発足(承認)
- ・平成29年度研究発表大会：25回記念大会、6月中旬、慶応大学、ポスターセッション等を含め実施予定、統一テーマ経営倫理の過去・現在・未来(承認)
- ・研究発表大会、日中交流等について(報告)

本日の2人の参加者紹介が行われた。

- ・増澤部会員(元東芝)、大島部会員(元花王)より自己紹介が行われた。

また先に佐久間部会員より提案のあった第3者委員会の件についてその後の活動準備状況が報告された。仮の名称として「経営倫理市民の会」として発足の予定との発表が行われた。

東日本大震災

引き続き、本日提出の2テーマについて報告・意見交換を開始した。

2. 第1テーマ：フォルクスワーゲンスキャンダルからの決別 西藤部会員

<報告骨子>

- ・事態のキーワード紹介 Key words：
 - “Vertrauen” (信頼)
 - “Zentralismus” (中央集権主義)
 - “Ja-Sager” (イエス・マン)
- ・司法の立場
- ・欧米の不正の実態
- ・日本対、欧米の体質の相違
- ・マスコミ記事の中における対応の厳しさ・・・不祥事発生企業の退職者の位置づけ
- ・土魂商才、和魂洋才、和魂漢才、The soul of Japan、についての紹介
- ・The Brain&Soul の重要性
- ・先進国としての国家における不祥事は、予想以上に深いところに生起
- ・Greedy is good Culture! に象徴されることが尊敬されがちな米国文化と日本の相違
- ・ドイツの人種的文化的カルチャーはVWの理念にはやや疑問を感じている

<質疑・意見交換概要>

- ・テスト中には決して多くのNO_xを出さない工夫をしていたことが、米国司法当局に見抜かれてしまった。テクノロジーゲームで米司法当局が勝ったということだけではないのか。すなわち米国の法律(排ガス規制)は本来おかしな規制であると考えて、それに挑戦したことが当局に見抜かれたということではないのか。
- ・排ガスについて元来ドイツはその基準、考え方が甘い。
- ・EUにおける制裁金が、米国のそれより高額であることや、米国の量刑ガイドライン

などの環境の中で起こったことと理解すべきでは。

- ・排ガス規制の対象は米国などでは新車についてのみであり、しり抜け的規制である。日本はその点、車検制度があるため、中古車に対する規制も機能している。
- ・トヨタとVWの経営の質を比べるとはるかにトヨタが高いと感じている。
- ・この事件の時日本の報道を見ると法務部長が変わったとあるが、現地の情報によるとインテグリティ&コンプライアンスオフィサーとなっていると認識する。
 - ・ドイツ人が好きな言葉として秩序がある。ドイツ人はこれを中心にものを考える
- ・VWの中ではどのようになっているかを内部からとった情報資料を参考に配布させていただく。VWの内部資料をベースとした。
 1. サステナビリティ、2. CSR、3. 行動規範と企業文化、4. コンプライアンスへの取組み、5. 参考資料・詳細資料は菱山会員提供の「西藤論文に触発されて 若干の補遺」
- ・VWではそうした考え方が経営TOPに徹底していなかったものと考えている。
- ・一連の議論に対し本日の発表において触れられないだろうと考えて提供した資料「賢人の警鐘（吉原毅、塚越寛）」、「日本型社会の矛盾（日経サイエンス）」を是非目にとめて頂きたい。

以下略

3. 第2テーマ：日本型の経営倫理教育の在り方と文部科学省の教育改革について
増澤部会員

<報告骨子>

日本型としたのは文科省の教育改革のことを意図している

1. 文科省教育改革の論点：個人主義の涵養（米国型市民育成）から生き方中心へ
⇒米国式市民（自立と宗教に基づく倫理観重視）と平均的日本人の決定的な違い
⇒GHQの呪縛からの解放（教育基本法注釈）により知識偏重を脱し、「共生」を志向
⇒科学・理系偏向の重厚長大主義による教養教育・文系崩壊の反省、「教養とは生き方」
⇒経営教育の再認識、経営とは「よく生きること」、つまり「経営＝教養」
⇒「よく生きること」とは倫理⇒経営、教養、倫理を統合し「生きる方法」を
 2. 文科省大学入試改革の論点：知識偏重から「考え方＝生き方」中心の高大連携へ
⇒現状の高校教育は知識中心⇒自分で考える力、生き方を教えるべき
⇒現状の大学入試は知識中心（AO入試は無試験同然）⇒徹底的な入試改革断行要
⇒目的は「生き方」を中心とした初等中等教育と高等教育の「接続」「一体化」
⇒最終目的は家庭教育、学校教育、企業教育、社会教育の「生き方」中心の統合
⇒「生き方」とは「よく生きる方法」、すなわち倫理、教養、そして経営の統合体
 3. 文科省倫理教育の重点：伝統思想「商人道」の重視と「公共」科目の必修化
⇒高等学校「倫理」科目の内容：
 - ・日本思想の詳述（儒教、陽明学、石門心学（石田梅岩）、荻生徂徠、本居宣長…）
 - ・特に「商人道」、正直、儉約、主客合一、他利思想の重視
 - ・さらに日本哲学を詳解（西田幾多郎（純粹経験、主客合一）、和辻哲郎（人間じんかん））
 - ・日本型経営倫理（学）の要素を網羅的、整合的に紹介する内容⇒現在「倫理」は選択科目であるが2020年度をめぐりに「公共」として必修化へ
⇒現在普通科高校に「経営」科目が存在しない⇒「倫理」を中心に再構成できる
⇒商人道は「芸術」あるいは「芸道」である⇒米国の新潮流「経営美学」の先取り
- ※文科省は日本型の経営倫理教育を目指し、大学教育を改革し、小・中・高の学校教育、家庭教育、企業教育をブリッジして行こうという現在の考え方である。

<質疑・意見交換概要>

- ・国際性、主客合一について例を挙げると武満徹という作曲家がいて世界的に評価さ

れている。彼が西洋音楽法に則った上で日本的なものを入れることで独自のものを作った。基本ルールを踏まえたところにポイントがあるのではないか

- ・今西田が見直されている。かなりのところまでは来ている
- ・こうした考え方、文科省の考え方の背景はNo.1主義を進めようとの考え方ではないか、北欧の教育の精神にはまったく触れていないのではないか
- ・西田哲学を教えるというが、そのように簡単に西田哲学は教えられるのか
- ・日教組はそのように言っている
- ・日教組といって切って捨てるという考えは思考停止に陥ると思う
- ・よく生きるということが言われているが、座標軸はどこか、プラトンは美しく生きるということで正しく生きるということを行っている。
- ・人に迷惑をかけない生き方
- ・本来家庭教育で教えるべきことが今は望めないので、大学で教えなければならないということを参事官は主張している
- ・よく生きるは、正しく生きるにすべきではないか
- ・米国流プラグマティズムに関することが一切出てこないが、倫理教育とプラグマティズムについてもきちんと触れるべきではないか
- ・検討してみたい
- ・実行の方向で進んでいるのか
- ・やや頓挫していると理解している
- ・現在の文科省はやや軸がずれているように感じる。

以下略

4. その他

次回日程：11月14日（月）中央大学駿河台記念館350室

（文責：河口）

議事録送付先(敬称略)：

[部会員]：朝倉、荒川、安藤、井上(真)、井上、岩倉、上原、遠藤(淳)、遠藤(梨)、大泉、大島、岡田(佳)、勝田、加藤、河口、川村、北川、木下、熊本、栗栖、桑山、小池、西藤、斉藤、佐久間、櫻井、佐藤、柴柳、鈴木(啓)、瀬名、潜道、高橋、武谷、田村、出口、徳山、中島、永井、那須、西井、西村、野瀬、野田、比賀江、樋口、肥後、菱山、平塚、古谷、古山、前原、増岡、増澤、増渕、松尾、松本、丸山、水島、水野、峰内、宮川、宮澤、山口、山中、山本、横館、吉村、

[学会本部]：梅津会長、水尾副会長、高橋前会長、内田事務長